

ではどうしてこのような差が大きくなるのか。その理由にはさまざまなものが挙げられるが、ここでは、就業形態の違いからくる差について指摘しておこう。

就業状態別に年収を見ると、正規の職員、自営業主・家族従業員・内職、派遣・嘱託、パート・アルバイトの順に、平均年収が高い（図 2-6-2）。

これを性別、年齢別、就業形態別に見たのが、表 2-6-1 である。

正規の職員の平均年収を見ると、年齢が高くなるにしたがって、男女とも高くなっている。

しかしながら、パート・アルバイト、派遣・嘱託の平均年収は、年齢が高くなるからといって高くなっているわけではない。パート、アルバイト、派遣、嘱託といった働き方は、日本型の年功賃金体系の外に位置するものであり、多くの正規の職員のように右肩上がりの所得が見込めるわけではない。逆に、多くの所得を得やすい正規雇用には無いメリット、たとえば労働時間・年収の調整のし易さといった事柄がパート・アルバイトには指摘されるところであるが、こうしたことから、これらの働き方の人々の所得の年功上昇は見られない。

女性の雇用形態に関する傾向としては、正規雇用以外の人（年功賃金ではない人）の占める割合が男性と比べて非常に多い。特に、既婚者のうち子どもを持っている者の、パート・アルバイト就業率が高い点はすでに指摘したところである。

このため、正規雇用とそれ以外の賃金の差が一層大きくなる年齢においては、特に男女の年収の差が大きく開く結果となっている。

表 2-6-1 就業上の地位別平均年収（万円）

		20-24歳	25-29歳	30-34歳	35-39歳	40-44歳	45-49歳	合計
正規の職員	男	313.9	415.6	488.6	545.4	614.8	717.4	524.9
	女	261.2	321.6	389.1	390.9	428.4	505.1	392.8
	合計	292.7	400.8	462.6	508.8	567.5	663.0	493.8
パート・アルバイト	男	156.2	219.2	181.0	193.8	190.0	154.4	183.0
	女	120.6	114.8	124.1	95.5	137.1	112.4	117.9
	合計	127.7	141.9	135.9	110.6	138.9	118.1	128.4
派遣・嘱託	男	280.0	272.2	330.0	270.0	280.0	275.7	284.5
	女	178.6	189.1	241.6	262.3	251.4	235.9	226.9
	合計	209.0	220.9	267.8	263.3	259.7	247.5	244.4
自営業主・家族従業者・内職	男	271.7	381.7	401.3	494.6	491.9	680.9	519.0
	女	165.0	202.0	205.6	163.3	278.9	276.8	237.2
	合計	200.6	342.6	342.0	395.3	433.4	520.3	425.1
合計	男	284.1	401.3	465.8	526.5	580.9	677.3	504.6
	女	179.6	233.3	291.7	262.9	289.1	301.4	267.0
	合計	223.9	358.7	404.5	434.6	466.4	524.2	418.9

2-7 きょうだい数と同居家族

本調査の回答者のきょうだい数は、全体 54.4%が 2 人きょうだいでもっとも多く、これに、3 人きょうだい (30.3%)、ひとりっこ (9.3%) が続く (図 2-7-1)。

性別、年齢別にみたものが、表 2-7-1 である。

図 2-7-1 きょうだい数割合 (%)

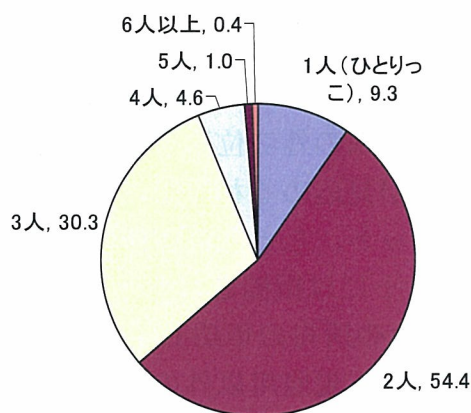


表 2-7-1 きょうだいの数 (性別、年齢別、%)

		1人 (ひとりっこ)	2人	3人	4人	5人	6人以上	合計
男	20歳代	8.2	51.8	33.3	5.5	0.9	0.3	655
	30歳代	7.9	55.6	32.0	3.5	0.8	0.3	657
	40歳代	9.7	53.5	29.2	4.8	2.1	0.8	662
	合計	8.6	53.6	31.5	4.6	1.3	0.5	1,974
女	20歳代	10.8	51.8	32.0	4.3	0.9	0.2	649
	30歳代	9.2	57.9	29.2	3.1	0.2	0.5	644
	40歳代	10.2	55.7	26.1	6.3	1.1	0.6	655
	合計	10.1	55.1	29.1	4.6	0.7	0.4	1,948

図 2-7-2 同居家族形態 (%)

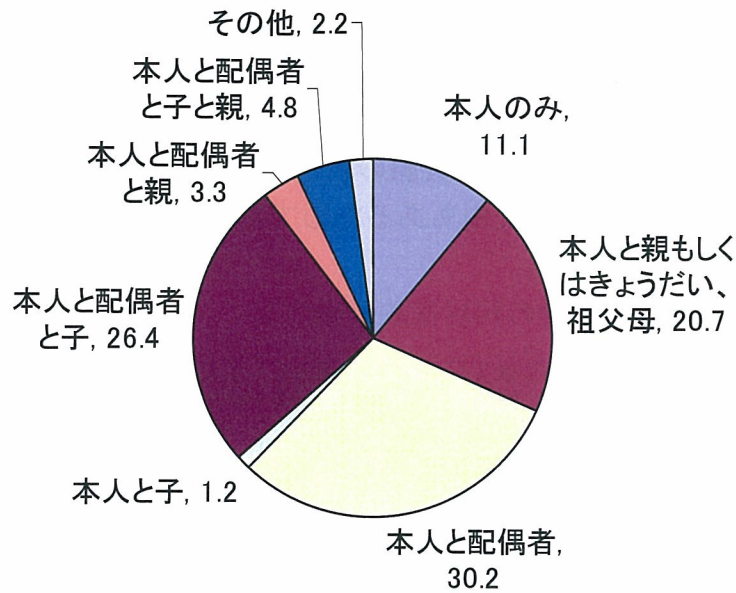


表 2-7-2 婚姻状態・子どもの有無別、年齢別の同居家族形態(%)

		本人のみ	本人と親もしくはきょうだい、祖父母	本人と配偶者	本人と子	本人と配偶者と子	本人と配偶者と親	本人と配偶者と子と親	その他	合計(人)
未婚者	20歳代	28.4	66.7	1.2	0.0	0.0	0.0	0.0	3.7	433
	30歳代	31.3	64.7	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	3.5	402
	40歳代	34.0	62.5	0.0	1.2	0.0	0.0	0.0	2.3	344
	合計	31.0	64.8	0.5	0.3	0.0	0.0	0.0	3.2	1179
既婚者子なし	20歳代	0.5	1.4	88.2	0.0	0.2	7.5	0.0	2.3	439
	30歳代	0.7	0.9	90.0	0.0	0.0	8.0	0.0	0.5	438
	40歳代	0.9	0.7	86.7	0.0	0.5	10.9	0.0	0.5	442
	合計	0.7	1.0	88.2	0.0	0.2	8.8	0.0	1.1	1319
既婚者子あり	20歳代	0.9	0.2	0.7	0.5	83.3	0.9	11.8	1.7	424
	30歳代	0.5	0.0	0.2	0.0	85.3	0.7	12.1	1.2	421
	40歳代	0.5	0.0	2.5	1.8	73.7	1.4	19.9	0.2	437
	合計	0.6	0.1	1.2	0.8	80.7	1.0	14.7	1.0	1282

また、同居家族についてたずねた結果が図 2-7-2 である。これを性別及び婚姻状態・子どもの有無別に見たのが表 2-7-2 である。

これを見ると、未婚者については、男性は 60.7%が女性は 69.2%が親と同居しており、なかなか未婚者の離家が進んでいないことがわかる。これを詳しく見ると(表 2-7-3)、年齢が高くなるにしたがって、本人のみの割合が高まるが、

40歳代であったとしても、男性の場合は37.7%、女性は29.8%であってそれ以外はほぼ親と同居している。

未婚者以外（既婚者子なし、既婚者子あり）を見ると、年齢が高くなるにしたがって、親と同居する割合が高くなる。これは子どもがいるほうが顕著であるが、子どもがいなくともそのトレンドはある。

このことは、親との同居が、子育て資源の増加という側面もあるが、親の面倒を見る（潜在的にでも）という理由もあるためである。

表 2-7-3 性別、年齢別の未婚者の同居家族形態(%)

		本人のみ	本人と親もしくはきょうだい、祖父母	本人と配偶者	本人と子	本人と配偶者と子	本人と配偶者と親	本人と配偶者と子と親	その他	合計(人)
男	20歳代	33.8	62.0	1.4	0.0	0.0	0.0	0.0	2.8	216
	30歳代	36.9	60.7	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	1.5	206
	40歳代	37.7	59.0	0.0	0.5	0.0	0.0	0.0	2.7	183
女	20歳代	23.0	71.4	0.9	0.0	0.0	0.0	0.0	4.6	217
	30歳代	25.5	68.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	5.6	196
	40歳代	29.8	66.5	0.0	1.9	0.0	0.0	0.0	1.9	161

表 グループ別 調査協力者基礎データ

	調査協力者人数	現在の年齢についてお答え下さい(歳)	あなたの配偶者の年齢についてお答え下さい(歳)	あなたの婚姻期間についてお答え下さい(年)	あなたの個人の年収はどれぐらいですか(万円)	あなたの世帯全体の年収はどれぐらいですか(万円)	あなたの週平均労働時間は何時間ですか(時間)	あなたの配偶者の週平均労働時間は何時間ですか(時間)	子どもの人数は几人ですか(人)	あなたの理想の子ども数は几人ですか(人)	あなたに持つ子どもの数は几人ですか(人)	あなたが今後ほしい子どもの数は几人ですか(人)	家事・育児を何割ぐらいを分担したいと思えますか(%)
未婚男性		平均値	34.4		427.4	674.7	40.3		0.6	2.1	1.3	1.5	43.4
	662	標準偏差	8.5		263.5	1098.3	19.3		0.4	1.0	1.0	1.1	13.4
		最小値	20		0	0	0		1	0	0	0	3
既婚子なし男性		最大値	49		3,000	20,000	110		4	10	4	5	100
	660	平均値	35.5	34.1	516.6	701.7	44.3	33.3		2.0	1.2	1.4	39.8
		標準偏差	7.3	6.9	261.0	530.6	17.0	17.2		0.9	0.9	1.0	12.5
既婚子あり男性		最小値	22	19	0	0	6	0		0	0	0	0
	651	最大値	49	55	30	2,500	10,000	112		5	4	4	100
		平均値	35.3	34.4	8.6	552.0	710.0	42.0	29.7	2.4	2.0	0.8	38.8
未婚女性		標準偏差	7.6	6.8	6.4	462.5	17.9	14.3	1.6	0.7	0.6	0.9	14.1
	658	最小値	21	19	0	50	2	0	1	0	0	0	2
		最大値	49	54	27	10,000	15,000	105	4	7	5	4	100
既婚子なし女性		平均値	34.4		315.4	571.1	32.6		1.6	1.9	1.0	1.1	64.8
	659	標準偏差	8.5		192.0	394.9	16.5		0.7	1.0	0.9	1.1	15.5
		最小値	20		0	0	3		1	0	0	0	7
既婚子あり女性		最大値	49		1,400	2,500	72		3	5	3	10	100
	631	平均値	34.6	37.0	7.1	236.1	674.6	28.5		2.0	1.0	1.2	66.0
		標準偏差	8.1	8.9	6.7	186.9	348.9	16.0		0.9	0.9	1.0	18.8
合計		最小値	20	21	0	0	0	0		0	0	0	7
	3,291	最大値	49	84	27	1,200	2,800	105		5	4	5	100
		平均値	34.8	37.5	10.0	204.1	631.1	24.4	45.7	2.5	2.0	0.6	65.8
	標準偏差	8.2	8.9	7.3	199.3	541.4	15.4	19.9	0.7	0.7	0.7	0.9	21.5
	最小値	20	20	0	0	0	2	3	1	0	0	0	9
	最大値	49	64	30	1,000	10,000	100	120	5	8	6	7	100
	平均値	34.8	35.7	7.9	418.9	666.9	37.4	40.3	1.7	2.2	1.4	1.1	52.0
	標準偏差	8.0	8.1	6.7	325.5	718.0	18.5	20.1	0.7	0.9	1.0	1.0	20.1
	最小値	20	19	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
	最大値	49	84	30	10,000	20,000	112	120	8	10	8	10	100

3. 子どもの数について

ほしいと思う子どもの数についての理想と現実を、人々はどのように把握しているかについて分析を行った。

3-1. ほしい子どもの数

今回の調査では、子どもの数について「現在の子どもの数 (Q10)」「理想の子どもの数 (Q11)」「実際に持つと思う子どもの数 (Q12)」「今後ほしいと思う子どもの数 (Q13)」の4つの質問を行った。

このうち「理想の子どもの数」は何も制限がなく場合最大限子どもが持てる場合の数だと考えられ (以下「理想の数」)、「現在の子どもの数」と「今後ほしいと思う子どもの数」を足したものはある程度の制約を考えた上で持ちたいと希望する子どもの数だと考えられ (以下「希望の数」)、「実際に持つと思う子どもの数」は現実的な見通しとして持てると思う子どもの数についての解答だと考えられた (以下「実際の数」)。

「理想の数」「希望の数」「実際の数」それぞれについて、性別、婚姻形態、子どもの有無で分けた回答者 6 グループ (未婚男性/既婚子なし男性/既婚子あり男性/未婚女性/既婚子なし女性/既婚子あり女性) ごとに平均と標準偏差を算出した結果が、表 3-1-1 と図 3-1-1 である。

ほしい子どもの数について、「理想の数」と「希望の数」と「実際の数」で違いがあるか、またグループ間に違いがあるかどうかを検討するため、2 要因の分散分析を行った。その結果、ほしい子どもの数、グループともに主効果が有意 (子どもの数 : $F(1, 7830)=1440.9, p<.0001$ 、グループ : $F(5, 3915)=194.9, p<.0001$) であり、さらに2つの要因の交互作用も有意であった ($F(10, 7830)=44.9, p<.0001$)。

ほしい子どもの数については、実際の数は理想の数よりも、さらに希望の数よりも有意に少ないことがわかった。しかし、既婚子ありの男性と女性に限っては、理想の子どもの数と希望の数に差がないことがわかった。

Scheffe 法による多重比較の結果、「理想の数」については、既婚子ありの男女で他の4グループよりも数が有意に高かった。また、「希望の数」については、既婚子あり男女の両グループが最も多く、次いで未婚男性が多く、次いで未婚女性と既婚子なし男性が多く、既婚子なし女性の数がもっとも少なかった。「実際の数」については、既婚子あり男女の両グループで有意に数が多く、次いで未婚男性と既婚子なし男性が多く、未婚女性と既婚子なし女性は最も人数が少なかった。

表 3-1-1. グループ別"ほしい子どもの数"平均値と標準偏差

グループ		平均値	標準偏差
未婚男性	理想の数	2.10	1.05
	希望の数	1.58	1.10
	実際の数	1.32	1.00
既婚子なし男性	理想の数	2.01	0.87
	希望の数	1.30	0.96
	実際の数	1.17	0.91
既婚子あり男性	理想の数	2.43	0.70
	希望の数	2.40	0.94
	実際の数	2.03	0.64
未婚女性	理想の数	1.93	1.00
	希望の数	1.25	21.13
	実際の数	0.97	0.95
既婚子なし女性	理想の数	1.96	0.92
	希望の数	1.19	1.02
	実際の数	1.00	0.92
既婚子あり女性	理想の数	2.50	0.74
	希望の数	2.34	0.98
	実際の数	2.05	0.71

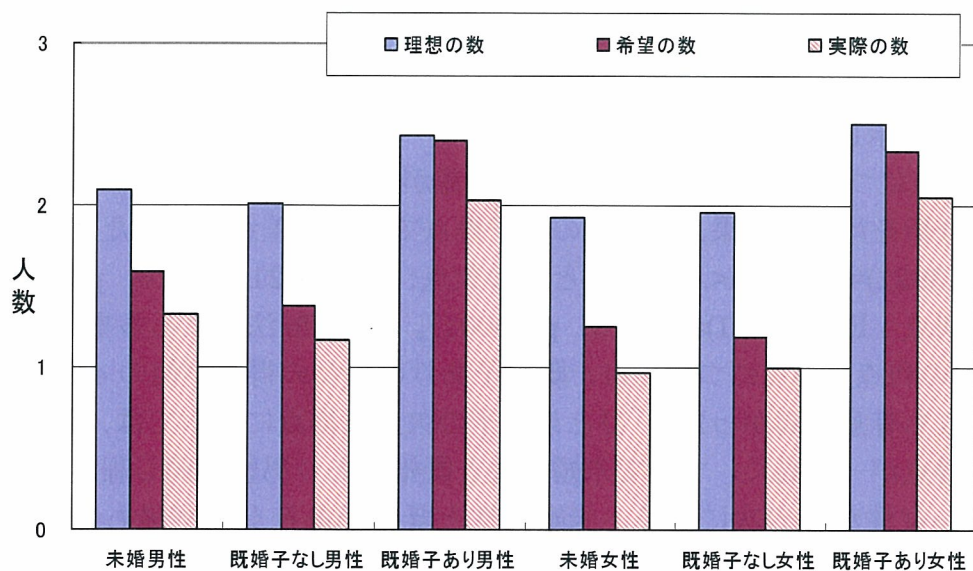


図3-1-1 ほしい子どもの数

以上のことから、ほしい子どもの数については、既婚者ですでに子どもがいる人たちは理想と希望に差がなく、実際にも理想や希望に近い人数の子どもを持つことが実現しそうだと考えているが、未婚者や既婚者で子どもがいない人たちにとっては、理想の子どもの数と希望や実際の見通しとしての子どもの数との乖離が大きく、現実的に少ない子どもしか持てないと思っていることがわかった。特に、未婚女性と既婚子なし女性で、「希望の数」が低いことに注目すべきであろう。もともとほしい子どもの数が少ないということは、子どもを持つことへの意欲が低いということを意味すると考えられる。これから子どもを産む可能性のより高い層で、子どもの持つことの意欲が低いため、現在の少子化が恒常化しているのだと言えるだろう。

3-2. 子どもの数についての考え方 (Q20)

ほしい子どもの数に関連すると思われる、兄弟やひとりっ子についての考え方（以下、子どもの数についての考え方）について検討を行った。

まず、人々の持つ子どもの数についての考え方を調べるため、ひとりっ子についてやきょうだいがいることの影響などに関する9項目(Q20)について、4件法で回答を求めた。以上のデータを用い因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行い、固有値や内容のまとまりを考慮した結果、3因子を抽出した（表3-2-1）。3因子はそれぞれ、子どもは複数いたほうがいいという内容の「複数の利点」、ひとりっ子のマイナス面を表す「ひとりの欠点」、ひとりっ子のポジティブな面を表す「ひとりの利点」と命名され、因子ごとに因子得点が算出された。各因子得点について、性別、婚姻形態、子どもの有無で分けた回答者6グループ（未婚男性／既婚子なし男性／既婚子あり男性／未婚女性／既婚子なし女性／既婚子あり女性）ごとに平均値と標準偏差を出した結果を、表3-2-2、図3-2-1に示した。

各因子得点について、グループ間に得点の差があるかを検討するため、1元配置の分散分析を行った結果、すべての因子得点で有意な差がみられた。（複数の利点： $F(5, 3921)=27.34, p<.0001$ 、ひとりの欠点： $F(5, 3921)=13.26, p<.0001$ 、ひとりの利点： $F(5, 3921)=24.73, p<.0001$ ）。Scheffe法による多重比較の結果、「複数の利点」得点については、既婚子ありの男女の得点が他の4グループの得点よりも有意に高かった。「ひとりっ子の欠点」得点については、既婚子なし男性の得点が一番高く、ついで未婚男性と既婚子あり男性が同じ程度に高く、既婚子なし女性とその次に高く、未婚女性と既婚子あり女性が最も低かった。

「ひとりっ子の利点」得点については、既婚子あり女性がもっとも高く、次いで既婚子なし女性と既婚子あり男性と未婚女性が同じ程度に高く、未婚男性と既婚子なし男性は最も得点が低かった。

表 3-2-1 "子どもの数についての考え方" 因子分析結果

	複数の利点	ひとりの欠点	ひとりの利点
きょうだいがいの方が助け合える	0.74	0.07	0.10
きょうだいが多い方が楽しい	0.73	0.14	0.05
ひとりっ子はかわいそうだ	0.62	0.30	0.03
同性の子どもが2人いたら、もうひとり異性の子どもがほしい	0.61	0.15	0.13
子どもは男女ともいた方がバランスがいい	0.57	0.20	0.21
問題をおこす子にひとりっ子が多い	0.14	0.75	0.07
ひとりっ子はわがままで	0.29	0.70	0.03
ひとりっ子だと親の目が行き届く	0.12	0.06	0.77
子どもがひとりだと、十分な教育を受けさせられる	0.09	0.02	0.56
寄与率(%)	25.50	13.64	10.91
累積寄与率(%)	25.50	39.15	50.05

表 3-2-2 グループごとの”子どもの数についての考え方” 因子得点

グループ	因子名	平均値	標準偏差
未婚男性	複数の利点	-0.10	0.95
	ひとりの欠点	0.07	0.86
	ひとりの利点	-0.16	0.86
既婚子なし男性	複数の利点	-0.10	0.94
	ひとりの欠点	0.14	0.83
	ひとりの利点	-0.16	0.76
既婚子あり男性	複数の利点	0.27	0.77
	ひとりの欠点	0.08	0.83
	ひとりの利点	0.04	0.80
未婚女性	複数の利点	-0.14	0.91
	ひとりの欠点	-0.11	0.83
	ひとりの利点	-0.04	0.82
既婚子なし女性	複数の利点	-0.10	0.88
	ひとりの欠点	-0.02	0.79
	ひとりの利点	0.08	0.77
既婚子あり女性	複数の利点	0.19	0.75
	ひとりの欠点	-0.17	0.80
	ひとりの利点	0.25	0.79

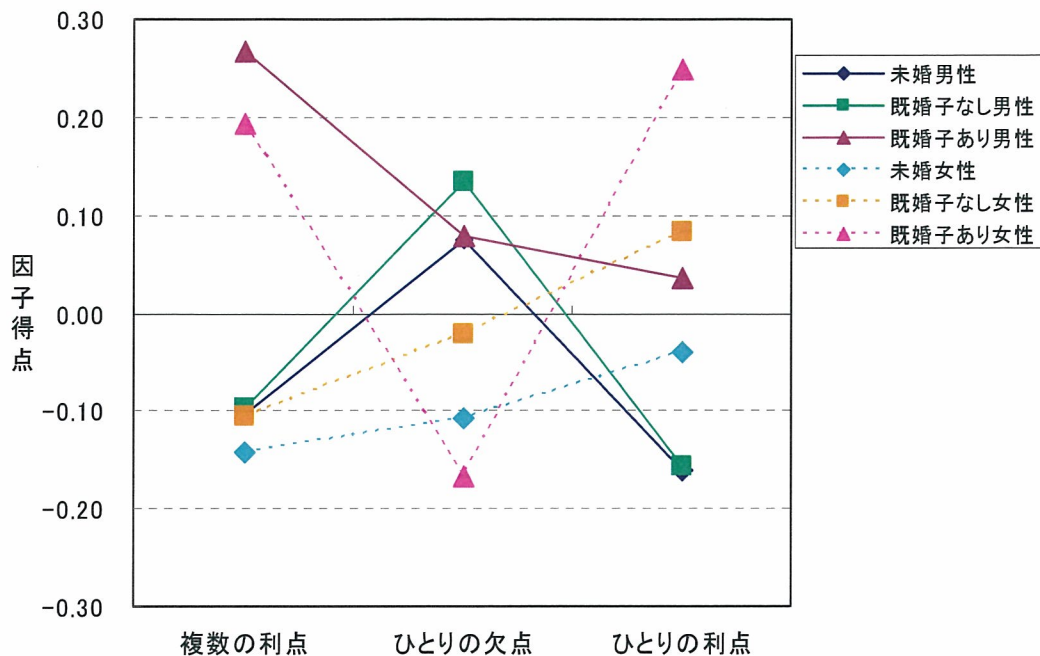


図3-2-1. 子どもの人数についての考え方

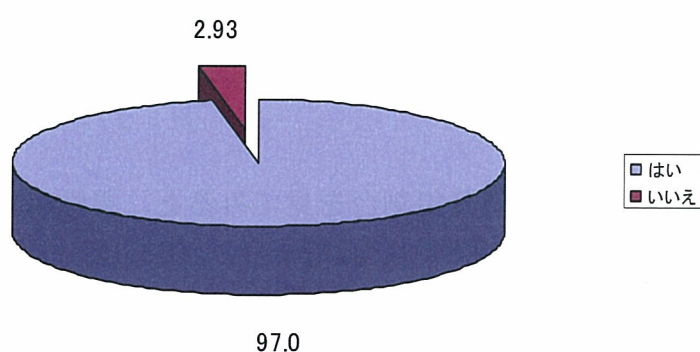
以上の結果から、子どもの数が複数いたほうが良いと考えているのは、既婚の子どもがいる男女であり、他の4グループは複数の利点を重視していないことがわかった。しかしながら、既婚子あり女性は、複数の利点も認めながら、ひとりっ子の欠点はあまり感じておらず、さらにひとりっ子の利点についての評価も高かった。つまりきょうだい数による影響をあまり重視せず、一人でも複数でもいいところがあると考えているようであった。既婚子あり男性も、女性ほどではないがひとりっ子についての否定的な評価はしていなかった。一方、未婚男性と既婚子なし男性は、複数の利点の評価が低いにも関わらず、ひとりっ子の欠点を高く利点を低く評価していた。つまり、子どもが何人であろうとそのデメリットばかりに目が向いているということであると考えられた。また、未婚女性と既婚子なし女性については、複数の利点が低く、ひとりっ子の利点を高く評価していた。つまり、子どもの数は少ない方がよいと考えている結果であると思われる。

4. 子育て意欲

4-1 子育て意欲と負担の割合

今後1人以上子どもがほしい回答者に、「Q14 あなたは、子育てをするつもりがありますか」とたずねたところ、全体の97%が子育てをするつもりがあると回答した（図4-1-1）。

図4-1-1 子育てをするつもりがあるかどうか(%)



続いて、子育てをするつもりがある回答者に対して、どのぐらいの割合(%)を分担したいと考えているかたずねたところ、男女で大きく差があり、男性は平均で40.8%を、女性は平均で65.5%を分担すると回答している（図4-1-2）。

図4-1-2 性別の子育ての分担割合の平均

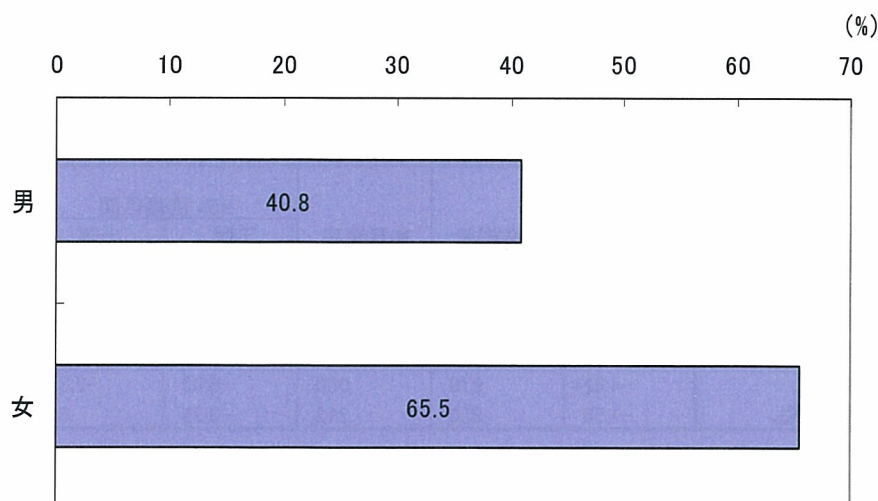
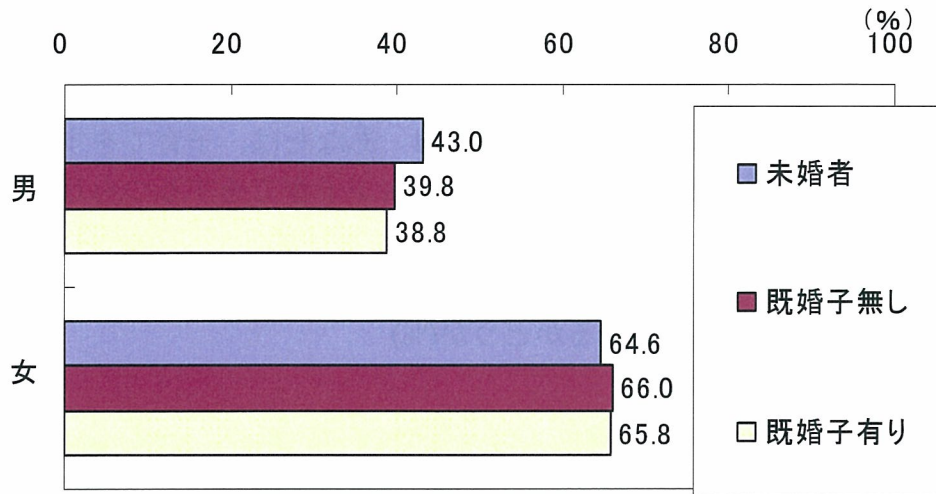


図 4-1-3 性別、婚姻状態・子どもの有無別の子育ての分担割合の平均



続いて、性別と婚姻状態別に希望分担割合を見てみると、男性は未婚者平均が43.0と最も高く、既婚子無し(39.8%)、既婚子有り(38.8%)が続く。これらについては、分散分析により有意な差が認められ(F(2, 1063)=6.568, p<.0001)、男性の婚姻形態・子どもの有無別の差については、未婚者とそれ以外の間に差がある(表4-1-1)。

女性に関しては、最も平均が高いのが、既婚子無しの66.0%で、既婚子有り(65.8%)、未婚者(64.6%)がこれに続く。女性については、婚姻形態・子どもの有無による差は認められなかった。

表 4-1-1 男性の婚姻状態及び子どもの有無別、子育て分担割合に関する多重比較

多重比較

従属変数: どの何割ぐらいを分担したいと思いますか。

Tukey HSD

(I) 未婚・既婚子無し・既婚子有り	(J) 未婚・既婚子無し・既婚子有り	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率	95% 信頼区間	
					下限	上限
未婚者	既婚子無し	3.05*	.868	.001	1.02	5.09
	既婚子有り	4.62*	.970	.000	2.34	6.89
既婚子無し	未婚者	-3.05*	.868	.001	-5.09	-1.02
	既婚子有り	1.56	.930	.213	-.62	3.75
既婚子有り	未婚者	-4.62*	.970	.000	-6.89	-2.34
	既婚子無し	-1.56	.930	.213	-3.75	.62

観測された平均に基づく。

*. 平均値の差は .05 水準で有意です。

図 4-1-4 性別、父親の育児状況別の子育ての分担割合の平均

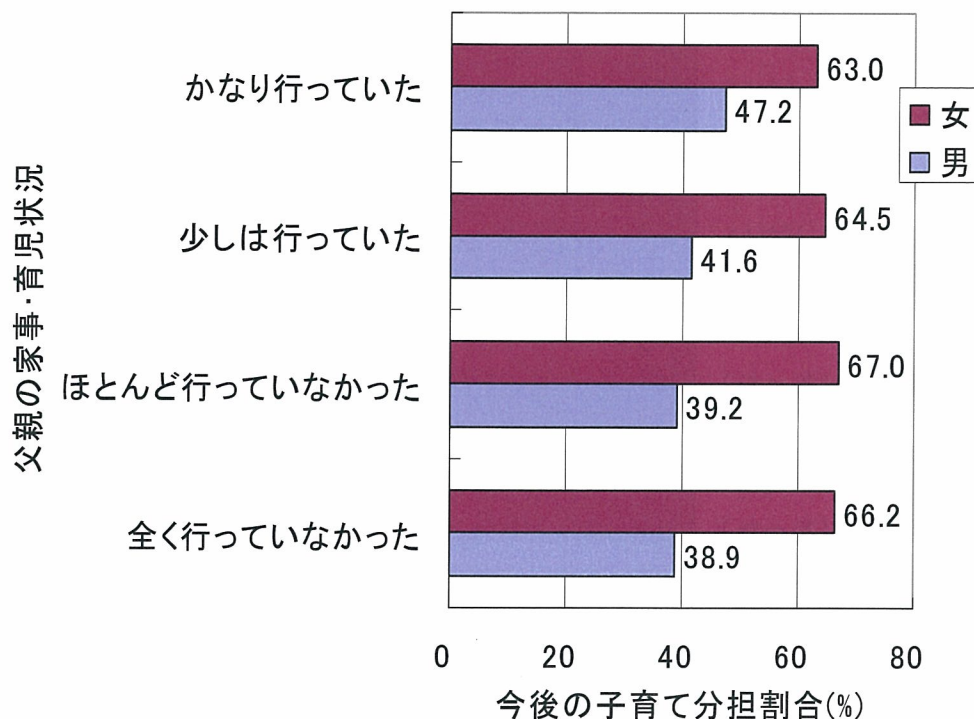


表 4-1-2 男性の父親の育児状況別、子育て分担割合に関する多重比較

多重比較

従属変数: どの何割ぐらいを分担したいと思いますか。

Tukey HSD

① あなたが成人するまでのお父さまの家事・育児の状況について、教えてください	② あなたが成人するまでのお父さまの家事・育児の状況について、教えてください	平均値の差 (i-j)	標準誤差	有意確率	95% 信頼区間	
					下限	上限
全く行っていなかった	ほとんど行っていなかった	-.40	1.054	.982	-3.11	2.32
	少しは行っていた	-2.55	1.071	.082	-5.31	.21
	かなり行っていた	-8.71*	1.586	.000	-12.79	-4.63
ほとんど行っていなかった	全く行っていなかった	.40	1.054	.982	-2.32	3.11
	少しは行っていた	-2.15	.864	.061	-4.38	.07
	かなり行っていた	-8.32*	1.453	.000	-12.06	-4.58
少しは行っていた	全く行っていなかった	2.55	1.071	.082	-.21	5.31
	ほとんど行っていなかった	2.15	.864	.061	-.07	4.38
	かなり行っていた	-6.16*	1.466	.000	-9.94	-2.39
かなり行っていた	全く行っていなかった	8.71*	1.586	.000	4.63	12.79
	ほとんど行っていなかった	8.32*	1.453	.000	4.58	12.06
	少しは行っていた	6.16*	1.466	.000	2.39	9.94

観測された平均に基づく。

*. 平均値の差は .05 水準で有意です。

次に、子育て分担割合について、父親の家事・育児状況別 (Q39) に平均を見てもみると (図 4-1-4)、女性については差がないが、男性については有意な差が認められた ($F(3, 1063)=6.543$ $p<.0001$)。多重比較を見てみると (表 4-1-2)、父親が家事・育児を「かなり行っていた」と回答した人とそれ以外の回答者の間に差があった。

図 4-1-5 性別、子どもとの接触頻度別の子育ての分担割合の平均

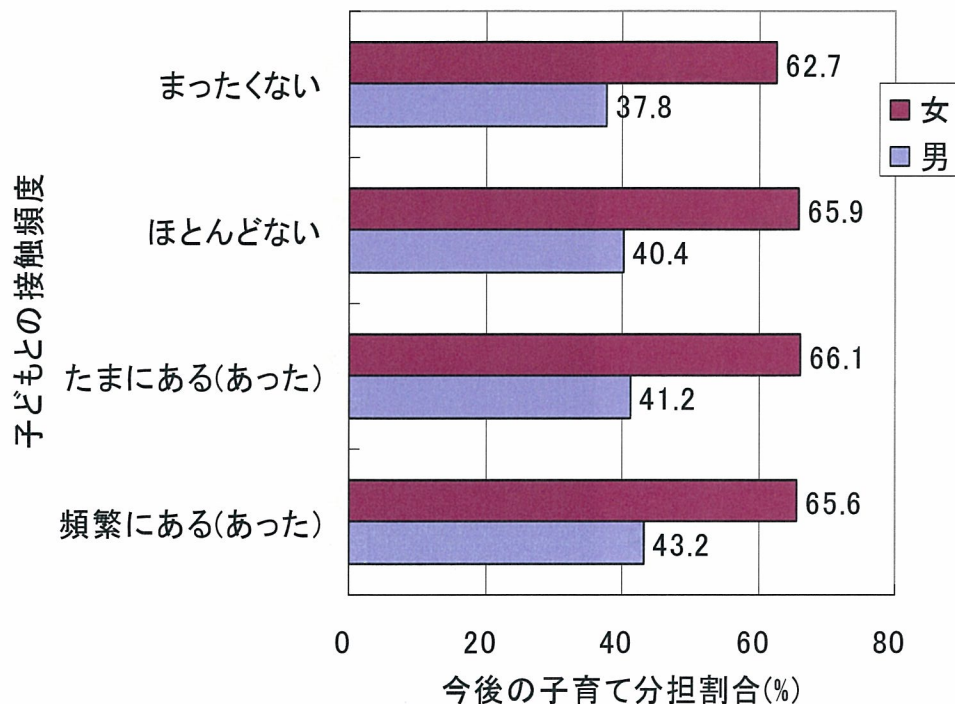


表 4-1-3 男性の子どもとの接触頻度別、子育て分担割合に関する多重比較

多重比較

従属変数: どの何割ぐらいを分担したいと思いますか。

Tukey HSD

		平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率	95% 信頼区間	
					下限	上限
頻繁にある(あった)	(J) たまにある(あった)	1.31	1.083	.621	-1.48	4.10
	(J) ほとんどない	2.88	1.153	.060	-.08	5.85
	(J) まったくない	4.99*	1.422	.003	1.33	8.65
たまにある(あった)	(J) 頻繁にある(あった)	-1.31	1.083	.621	-4.10	1.48
	(J) ほとんどない	1.57	.891	.290	-.72	3.87
	(J) まったくない	3.68*	1.219	.014	.54	6.82
ほとんどない	(J) 頻繁にある(あった)	-2.88	1.153	.060	-5.85	.08
	(J) たまにある(あった)	-1.57	.891	.290	-3.87	.72
	(J) まったくない	2.11	1.281	.355	-1.19	5.40
まったくない	(J) 頻繁にある(あった)	-4.99*	1.422	.003	-8.65	-1.33
	(J) たまにある(あった)	-3.68*	1.219	.014	-6.82	-.54
	(J) ほとんどない	-2.11	1.281	.355	-5.40	1.19

観測された平均に基づく。

*. 平均値の差は .05 水準で有意です。

続いて、子どもとの接触頻度別 (Q40) に平均を見てみると (図 4-1-5)、女性については差がないが、男性については有意な差が認められた ($F(3, 1063)=3.908$ $p<.0001$)。多重比較を見てみると (表 4-1-3)、まったくない人と頻繁にある人及びたまにある人の間に差がある。

表 4-1- 男性の家事・育児時間と今後の育児分担割合の相関関係

		相関係数	
		どの何割ぐ らいを分担 したいと思 いますか。	あなたは1週 間で、家事や 育児を何時間 くらい行っ ていますか。
どの何割ぐ らいを分担 したいと思 いますか。	Pearson の相関係数 有意確率 (両側) N	1 . 1300	.154** .000 1300
あなたは1週 間で、家 事や育児を何時間 くらい行っ ていますか。	Pearson の相関係数 有意確率 (両側) N	.154** .000 1300	1 . 1974

**、相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。

続いて、実際の家事・育児時間 (Q31) と今後の育児分担割合の相関関係を見ると、男性のみ、1%水準で有意な相関関係があった。

ここまで見てきたように、女性については、どの属性別に見ても、差は小さい。別の言い方をすれば、子どもを持つと思っている女性は押しなべて、多くの分担を覚悟している。

一方、男性については、婚姻形態、父親の育児状況、(本人の)子どもとの接触頻度によって差があった。また、家事・育児時間とも相関関係が認められた。

女性と比べて男性は、相対的に育児分担の希望の割合が圧倒的に小さい。しかしながらその中でもこうした属性 (変数) によって、回答に差がある。

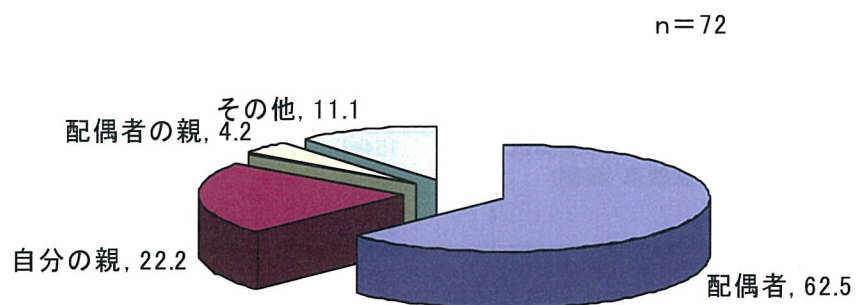
ここに、男性の育児の参加増加の可能性があると考えられる。実際に家事・育児を行う、若いうちに子どもと接触をもつ、こうしたことが育児参加に影響を及ぼす可能性がある。

4-2 自分が子育てをしない時

今後1人以上子どもがほしい人のうち、子育てするつもりがない人に対して、自分以外の誰が子育てを行うと考えているのかたずねた (Q14_SQ2)。

その結果、全体の 62.5%が配偶者と回答している。続いて、自分の親 (22.2%)、配偶者の親 (4.2%) の順となっている。

図 4-2-1 自分以外の子育てをする人(%)



これを男女別に見ると、男性の90.0%が配偶者と考えている。女性の場合は、配偶者と回答したものは、28.1%にとどまっている。女性の場合最も多いのが自分の親で、40.6%にも上る。夫ではなく、自分の親に対して子育てを期待するという結果が出た。

表 4-2-1 性別に見た自分以外で子育てをする人 (%)

	配偶者	自分の親	配偶者の親	その他	合計(人)
男	90.0	7.5	0.0	2.5	40
女	28.1	40.6	9.4	21.9	32
合計	62.5	22.2	4.2	11.1	72

つづいて、自分で子育てを行なおうと思わない理由についてたずねた(Q14_SQ2)。

男女とも最も多かったのが、「自分は向いていないから」であった(表 4-2-2)。男性については、「他の事に専念したいから」がこれに続く。

なお女性については、その他の割合が34.4%と非常に多かった点に留意する必要がある。

表 4-2-2 性別に見た子育てを行なおうと思わない理由

	子育てに興味がないから	他のこと(仕事など)に専念したいから	仕事上の昇進や昇格に影響があると困るから	自分は向いていないから	子育てをする慣習がないから	その他	合計(人)
男	10.0	32.5	2.5	40.0	2.5	12.5	40
女	6.3	21.9	0.0	34.4	3.1	34.4	32
合計	8.3	27.8	1.4	37.5	2.8	22.2	72

5. 子どもを持つ理由

子どもを持つことについて、そのメリットやデメリットに関して、ひとびとがどのような考え方を持っているかについての分析を行った。

5-1. 子どもを持つメリットについて (Q17)

柏木ら（柏木・永久、1999）の「子どもを持つ理由」調査の質問項目を参考に、子どもを持つメリットについての考え方を問う質問紙を作成した（Q17）。子どもを持つことについての価値をどう評価しているかという点にしぼって調査を行う目的のため、柏木の研究における調査で下位尺度として見出された「条件依存」や「子育て支援」についての項目は除外し、19項目に対して4件法で回答を求めた。

以上のデータで因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行い、固有値や内容のまとまりを考慮した結果、4因子を抽出した（表5-1-1）。

表5-1-1 ”子どもを持つメリット”の因子分析結果

	現在の生活の充実	個人的体験	社会的役割	老後の生活の充実
子どもがいると生活に変化が生まれる	0.886	-0.027	-0.011	0.054
子どもがいると家庭がにぎやかになる	0.872	-0.016	-0.010	0.067
子育てをすることで自分が成長する	0.690	0.128	0.091	-0.029
子どもを持つことで夫婦の絆が強まる	0.532	0.176	0.159	0.031
子育ては生き甲斐になる	0.415	0.349	0.110	0.035
血のつながった存在が欲しい	-0.085	0.777	0.058	0.124
配偶者の子どもが欲しい	0.189	0.695	-0.080	-0.057
子どもを育ててみたい	0.301	0.683	-0.102	-0.093
子孫を残したい	-0.157	0.648	0.287	0.090
女性として妊娠出産を経験したい／してほしい	0.067	0.616	-0.054	0.025
子どもが好き	0.364	0.474	-0.028	-0.109
次の世代を作るのは、人としてのつとめ	-0.026	-0.049	0.987	-0.084
子を産み育ててこそ一人前	0.140	0.018	0.671	-0.021
結婚して子どもを持つのは自然なこと	0.246	-0.008	0.620	-0.013
子どもは将来の社会の支えとなる	0.264	-0.122	0.570	0.101
姓やお墓を継ぐ者が必要	-0.264	0.116	0.492	0.344
年を取った時子どもがいると安心	0.144	-0.037	-0.100	0.936
年を取った時子どもがいないと寂しい	0.175	0.051	-0.085	0.767
子どもがいると老後の経済的な支えになる	-0.145	-0.043	0.231	0.661
寄与率(%)	49.371	10.467	5.490	5.382
累積寄与率(%)	49.371	59.838	65.327	70.710

まず第1因子は「子どもがいると生活に変化が生まれる」「子育てをすることで自分が成長する」などの項目を含むことから「現在の生活の充実」因子と命名した。第2因子は「血のつながった存在が欲しい」「子どもを育ててみたい」などの項目を含むことから「個人的体験」と命名した。第3因子は「次世代を

作るのは人としてのつとめ」「子を産み育ててこそ一人前」などの項目を含むことから「社会的役割」と命名した。第4因子は「年を取ったとき子どもがいると安心」「子どもがいると老後の経済的な支えになる」などの項目を含むことから「老後の生活の充実」と命名した。それぞれの因子ごとに因子得点を算出し、性別、婚姻形態、子どもの有無で分けた回答者6グループ（未婚男性／既婚子なし男性／既婚子あり男性／未婚女性／既婚子なし女性／既婚子あり女性）ごとに平均値と標準偏差を出した結果を、表5-1-2、図5-1-1に示した。

表5-1-2. グループごとの”子どもを持つメリット” 因子得点

グループ	因子名	平均値	標準偏差
未婚男性	現在の生活の充実	-0.25	1.00
	個人的体験	-0.22	0.98
	社会的役割	0.03	1.00
	老後の充実	-0.07	0.97
既婚子なし男性	現在の生活の充実	-0.12	1.00
	個人的体験	0.02	0.99
	社会的役割	0.00	0.98
	老後の充実	-0.02	0.95
既婚子あり男性	現在の生活の充実	0.31	0.75
	個人的体験	0.24	0.78
	社会的役割	0.39	0.89
	老後の充実	0.20	0.89
未婚女性	現在の生活の充実	-0.27	1.01
	個人的体験	-0.28	0.97
	社会的役割	-0.31	0.91
	老後の充実	-0.17	1.00
既婚子なし女性	現在の生活の充実	-0.04	0.97
	個人的体験	0.01	1.04
	社会的役割	-0.19	0.91
	老後の充実	-0.05	0.95
既婚子あり女性	現在の生活の充実	0.39	0.78
	個人的体験	0.24	0.76
	社会的役割	0.09	0.86
	老後の充実	0.11	0.92

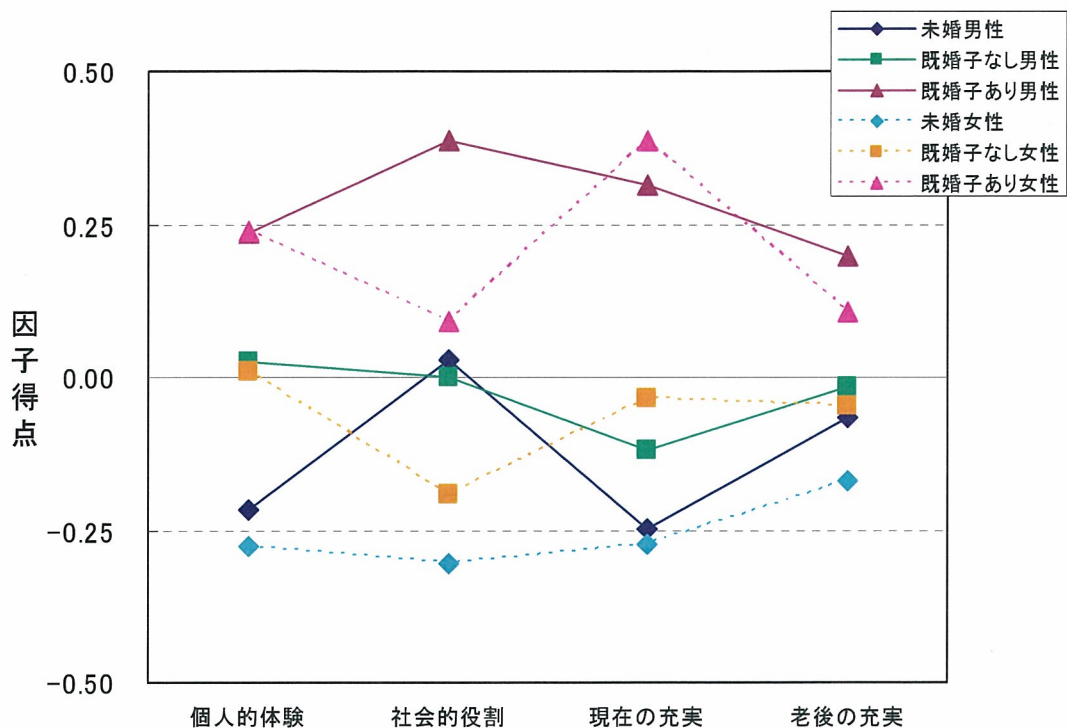


図5-1-1. 子どもを持つメリット(グループ別)

各因子得点について、グループ間に得点の差があるかについて、1元配置の分散分析を行った結果、すべての因子得点で有意な差がみられた。(現在の生活の充実: $F(5, 3921)=60.51, p<.0001$ 、個人的体験: $F(5, 3921)=35.91, p<.0001$ 、社会的役割: $F(5, 3921)=44.18, p<.0001$ 、:老後の生活の充実 $F(5, 3921)=12.56, p<.0001$)。Scheffe 法による多重比較の結果、「現在の生活の充実」得点については、既婚子ありの男女の得点が最も高く、ついで既婚子なし女性、ついで既婚子なし男性が高く、未婚の男女は最も低かった。「個人的体験」得点については、既婚子あり男女の得点が一番高く、既婚子なし男女の得点が次いで高く、未婚男女の得点が最も低かった。「社会的役割」得点については、既婚子あり男性の得点が一番高く、ついで既婚子あり女性と未婚男性と既婚子なし男性が同程度に高く、未婚女性と既婚子なし女性は得点が低かった。「老後の生活の充実」得点については、既婚子あり男性が最も高く、ついで既婚子あり女性が高く、既婚子なし男女と未婚男性がついで高く、未婚女性が最も低かった。

以上の結果から、全体的傾向としては、どの因子についても同じ婚姻形態であれば女性よりも男性のほうが得点が高いことがわかった。つまり、子どもを持つ理由に関わるメリットは、男性のほうがどの側面からもより高く評価しており、女性は子どもを持つメリットをより感じられない状況にあると考えられる。特に、社会的役割については男性と女性の考え方の差が大きく現れており、男